

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ②

初期仏教の「ことば」と仏典

当時すでに社会的秩序として定着していたバラモン教の天啓聖典ヴェーダは、長きにわたり口伝によってのみ伝承されていた。ヴェーダとは紀元前1200年ごろから紀元前500年ごろまでにまとめられたサンスクリット語聖典群の総称で、シュルティ（天から垂示され聞かされた教え）と呼ばれていた。その内容は特定のバラモン階級によってのみ保持され、決して筆記されることなく、完全な形で伝承されていた。現在はヴェーダ文献群の一部が文字化され出版されているが、インドおよびネパールでは、ヴェーダの伝統的な学習は、未だに師弟による朗誦を通して行われている。天啓聖典の「ことば」を絶対的な「音」として神聖視し、その宗教的権威を保持するためには、正確な発音とともに一言半句聞き漏らさない口伝の伝承が一番確実な伝承方法であったに違いない。筆記された場合、誤記や散逸といった恐れもあるので、バラモンの口と耳という器官、そして記憶能力を絶対的なものであると信頼し、聴聞による伝承が行われてきた。このような伝統はバラモン教特有の言語観に由来する。

はじまりももたず終りももたない〔永遠なものである〕ブラフマンは、コトバそれ自体であり、不滅の字音である。そこから現象世界の形成があるそれ（ブラフマン）は、意味＝対象＝事物（アルタ）として、〔この世界に〕別の姿を取って現れてくる。（バルトリハリ、赤松訳、2005: 15）

古典サンスクリット文法学者のバルトリハリは、サンスクリットという典礼言語を単一の起源的言語として、宇宙の絶対的な原理はブラフマンそのものであると捉え、この起源的な「ことば」が仮の姿として分節化されることによって現実世界が展開されるという世界観を主張した。

永遠かつ絶対的な唯一の存在であるブラフマンこそが「ことば」そのものであり、世界存在そのものであるという思想のもと、バラモン教ではブラフマンからこの世界の開闢がなされたとする。その字音は、永遠不変のものであり神聖なものでなければならない。つまりヴェーダの「ことば」には特別な宗教的価値が与えられていたので、それらは筆記されうる対象ではなかったのである。

古代インドにおいて正統な社会規範として生活の基盤にあったバラモン教を批判し、脱バラモン教的人間観を訴えた釈迦も、そして彼の弟子たちも、インド特有のバラモン教的言語観とその宗教伝統から脱却することは容易ではなかったと思われる。釈迦も自身の悟りを人々に説く過程では口伝の伝承を踏襲しており、釈迦在世中、自身によっても、また弟子たちによってもそれが成文化されることはなかった。

釈迦は北インド一帯の様々な地域で説法を行っていたので、その対象者の言語も様々であった。また、弟子となった人々も様々な地域や階級、民族から集まっていたので、サンガにおける言語も恐らく雑多であったに違いない。そのような状況の中で釈迦はあるバラモン生まれの出家者の二人の兄弟とのやり取りの中で次のように語ったとされる。

時にヤメール、テークラと名づける二人の兄弟の比丘があった。バラモンの生まれで、ことば使いも良く、聲も美しかった。（中略）かれら比丘は世尊に次のように述べた。「尊師よ、今や比丘らは名を異にし、姓を異にし、生まれを異にし、族を異にして出家しました。かれらは自己のこ

とばによって佛語を汚しています。尊師よ、願わくはわれら佛語をヴェーダ語に轉じたく存じます」… 佛陀は比丘らに言った。「比丘らよ、佛語をヴェーダ語に轉じてはならない。轉ずるものは悪作に墮する。比丘らよ、わたしは自己のことばによって佛語を習うことを許します」と。（前田、1975: 95）

このように、「自己のことばによって」という記述から、サンガ内においてはそれぞれの母語を自由に用いることが認められていたことがわかる。さらに「佛語」、つまり、釈迦の教説をそれぞれの母語において学習することも許されていた。釈迦がそれらをあえて統一することはなかったようである。ただ、ヴェーダ語で教えを学び、説くことは強く戒めていた。釈迦は、バラモン階級を最高位とする身分制度や儀礼中心の信仰活動を批判するとともに、一般の人々を救済対象としていたので、ヴェーダ語によって自らの教えが限定されることを危惧していたようだ。

釈迦入滅後、直接教えを乞うことが不可能となり、弟子たちはそれぞれが聞いた釈迦の教えを持ち寄り確認する会議を行った。これをサンギーティ（結集）という。サンギーティは語源的には「朗誦」や「唱歌」を意味する。おそらく弟子たちが互いの記憶を確認し合い、釈迦の「ことば」をそろって朗誦していたのだろう。そのような教えの編纂会議は数回行われたといわれる。サンギーティの目的は釈迦の断片的な教えの整理と解釈の統一であったが、戒律の解釈をめぐる教団内で意見が対立し、上座部と大衆部に二分する結果となった。さらにその後、数多くの部派に分裂し、仏教は部派仏教の時代に入っていく。その過程で釈迦の「ことば」は、入滅後数百年の後に三蔵（經、論、律）として纏められた。それらがパーリ語原始仏典として主に上座部仏教において現代まで保持されている。

このパーリ語の起源は北インドの西部であり、釈迦が布教していた北インド東部とは明らかに異なる言語圏であった。したがって仏教における最古の原典はすでに翻訳原典であったということになる。また、釈迦の入滅後、数回にわたるサンギーティを経て様々な付加や削除が行われていることなどを考えると、最古の原始仏典でさえも釈迦の教えそのものを直接的に伝える原典とは言い難いとする見方もある。

しかし、歴史的な人物としての釈迦は、生涯を通じて仏教という特定の宗教の創始者というよりも、どのような境遇であれ、どのような宗教家・思想家であれ、すべての人間が歩むべき正しい道を示し、その実践を生き「ことば」で説いた。インド学の碩学、中村元は、「後世の經典作者は、仏教という特殊な教えをつくってしまった。」（中村、1988: 464）と指摘している。

釈迦の「ことば」は常に世の人々に開かれていた。釈迦自身の姿勢と彼の「ことば」には、自由な変換を許容する「しなやかさ」が見受けられる。しかし、釈迦の教えを正しく伝えるべくパーリ語原始仏典が纏められると、皮肉にもその「ことば」は出家者だけのものとなり、思想的に深められ、精緻な哲学体系として更新されていく。その結果、民衆の素朴な信仰との乖離が生じ、仏教は次第に硬直化していくことになる。

[引用文献]

中村元『ゴータマ・ブッダ―釈尊の生涯―』春秋社、1988年（第10刷）。
バルトリハリ（赤松明彦訳）『古典インドの言語哲学1』平凡社、2005年（第2刷）。
前田恵学『原始佛教聖典の成立史研究』山喜房佛書林、1975年（第3刷）。